

2024/4/1

関係各位

Far East Group

会長 大嶋 謙嗣

会報四月号 誓願・信条の構築（三）

目次

- ・ 生命燃焼の八側面
- ・ 美学を生きる
- ・ 八側面への配置
- ・ 精神的背骨

今回は、前回抜き出した「葉隠」の言葉を抽出して、人間の生きる目的である「生命燃焼」と、その内実である「事業を通してこの世に勇知仁の断行・具現化」、「他者の為に生きる、命を捧げ尽くす「何ものか」の為に生きる」、「魂の無限の成長」の為の八側面（①道／造化への帰依、②自立自尊の覚悟、③生命燃焼の自覚、④勇知仁の断行、⑤崇高さを目指す美学、⑥判断基準、⑦永遠の自己革命、⑧先人の魂／エール）へと、振り分けて配置していく。

まずは生命燃焼の八側面について、前回の補足から。

● 生命燃焼の八側面

① 道／造化への帰依

人類が生きる（死ぬ）目的とは何か。それはひとりひとりがその魂を磨くことであり、己の勇・知・仁、愛、義、信念の具現化である。それを「自己の実現」と言い、「自他の共栄」と言う。それは、自己の命を捧げる「何ものか」の為に生きることを意味する。生きるとは、どう死ぬかを決めて生きることである。答えは偉人の魂に触れながら自分で決めていくより他はない。偉人の魂に触れ合うにはどうするか、古典を読むことである。なぜ偉人の魂に触れる必要があるのか。自分より偉大なものに触れていれば、自己の魂も良い感化を受けるからである。

人間は生命であり、生命はこの宇宙の中で生まれた。ならば、宇宙の本質を自覚し、生命の本質を自覚するよう努めていけば、人間の本質や生きる目的は自ずから分かってくる。

宇宙のはたらきを一言で言えば「造化（万物流転、生成化育）」である。造化とは、宇宙が自己を実現しようとする無限の努力である。造化のはたらき（エネルギー）が万物を生成化育させ、万物を生成流転させている。それは、無限に向かう躍動である。

宇宙のはたらき、造化のエネルギーの本質をどう見るか。星の生成について考えてみる。星は、星雲から恒星が出来て、その星が燃えていく。やがて恒星は燃え尽きて、爆発する。そのあとはまた星雲になり、同じような星雲が集まってまた新たな星が出来ていく。宇宙はこの繰り返しである。この「循環・還元」という流れが次の新たなものを生み出していく。次の為に自己を犠牲にする、貢献する、献身する。それを人間は「造化・愛・仁・神・大生命」等と呼んだ。この循環・還元システムはつまり、自分は次の者を生み出すために生きることであり、それは、自分より大切なものの為に生きることになる。その対象が、西洋では一神教の神となり、騎士道へと通じていった。我が国では自然を通じて宇宙の循環システムを理解し、それを生き方や文化に投射してきた。人間の文化とは、つまりは宇宙のはたらき（秩序・法則・掟）をどう理解して、どう表現するかの違いなのである。根底にあるものは皆同じである。そして、太陽は太陽、地球は地球としての価値がある。太陽は太陽でなくてはならないし、地球は地球でなくてはならない。人間に敷衍しても同じこと。男は男、女は女である。違うからこそ価値がある。今日では、男女の性差を言うことが差別だと騒ぐことも少なくないが、そが行き過ぎると、太陽と地球が平等だと言うのと同じになってしまう。

② 自立自尊の覚悟

太陽は太陽、地球は地球として唯一のものとしてあるように、我々人間もひとりひとりで違う。その意味で人間は、ひとりひとりが孤独な存在である。私たちは「孤独」という一つの「点」であるという自覚が必要である。しかし、只の点で終わるのではない。全き一である宇宙との対峙の中での一点である。主体性創造性を発揮することができる一つの点であるからこそ、他の点と繋がって線となることも、その線を繋げて面となることも、その面を重ねて立体となることも自在なのである。

人間にとって最も大切なものは魂である。「魂」とは、宇宙に遍満している陰（調和・統一・収斂・潜蔵）の側面のエネルギーである。我々人間は、この陰のエネルギーの分霊を受け取って人間と成っている。それを自覚することができると人間である。つまり、人間はひとりひとり、宇宙の陰のエネルギーの分霊である。宇宙というのは「魂の本体」である。その魂の分霊を受け、また一方では、宇宙から陽（発現・分化・変化・発展）の側面のエネルギーによって個別の肉体も与えられて生きている。この魂（陰のエネルギーの分霊）と肉体（陽のエネルギーの具現化）が融合した陰陽両方の混沌としたエネルギーの塊が「心」として形成される。魂は肉体と融合して「心」として作用する。魂と心が融合する中で自分独自のエネルギーが生じ、そのエネルギーが自分の中で立ち上げるもの、それがその人の「精神」である。その精神を主として身体を駆使し、人間というものは自分が創ったものとなっていくのである。その意味で、ひとりひとりとはどこまでも別個の存在である。四書の「大学」ではこれを「慎独」と言う。人間は絶対自慊の存在であり、それを支える最も大切な精神が

「独立自尊」である。

同時に、私たちひとりひとりの魂は、宇宙という魂の本体と繋がっている。繋がっていないならば生きてはいない。繋がっているという意味では永久不慊であり、宇宙の意志とも言うべき陰の側面のエネルギーを不断に受け取る必要がある。従って、「孤独」という独立自尊・絶対自慊でありながらも、永久不慊であるからこそ、決して「孤立」であってはならないが、「孤独・独立自尊」の存在であるべきなのである。

③ 生命燃焼の自覚

自分という「孤独」の一点は、自立自尊・独立自尊の気概がなくては、その命を燃焼させることはできない。命は死ぬまで燃焼させねばならない。それが問答無用の生命の在り方である。勿論、そんな考えは疲れるから嫌だ、もっとドラドラ生きたいという人もいるだろう。私はそれを「退屈だ」と言っているのである。安楽や快適を得たい人は「葉隠」に近付いては危険である。「葉隠」は命懸けの体当たりの末に死ぬという人生を讃える。私心（私利私欲）から得ようとする幸福や快楽、安楽、保障等から最も遠くに位置するものである。しかし、生命燃焼の結果として、想像以上の豊かさや楽しさや充実した生活を体現できてしまう。

④ 勇知仁の断行

生命の自己燃焼こそが生命の本質であるとすれば、この世界は、己の勇知仁や愛や信念を断行していく場所であり、自己の魂を磨く場所である。それは、宇宙の意志（魂）が、人間を通して地上にその意志を展開しているものであり、まさに造化の具現化である。

人間の本体は魂なのだから魂が一番大切である。だが同時に、人間には肉体も与えられている。そして魂（心・精神）と肉体は不可分のものである。精神の無い肉体だけの人間もいなければ、肉体の無い精神だけの人間も存在しない。

人間には肉体が与えられているのだから、行動しなくてはいけない。行動とは己の勇知仁・愛・信念の断行であり、その具現化を目指すことである。具現化しなければ何も残らず、魂の躍動を自覚しにくい。勿論「具現化」できたかどうかは結果論であるから、全てを自分で決めることは不可能である。だから、実行レベルでは「断行」なのである。結果は問わない。しかし、具現化を目指して断行するのである。

⑤ 崇高さを目指す美学

どんな事柄が起きたとしても、自分の運命を丸ごと愛する。当人にとって「大変なこと」が起こったとき、辛い苦しい悲しいで終わるのでは面白くない。仕方がないと受け容れたり耐えたりするだけでも退屈だ。私に挑んでくるとは面白いと欣喜雀躍するのが生命を燃焼させる為の在るべき態度である。それを楽しいと感じることさえできる。それは、自分に起こる運命を、良いことも悪いことも丸ごと全部愛するという

姿勢から来る。

「楽しい」や「面白い」とはどういうことを、私はずっと考えてきた。勿論多義的なことは分かっている。が、結局私にとっては、しんどいことを乗り越えることが「楽しい」なのだ。何故そう感じるのか？それは、魂が磨かれるからなのだと思う。自己の魂が磨かれること、躍動すること、それが「楽しい、面白い」ことなのである。その他の楽しさは浅い。魂は磨かれない。それがダメと言うのではなく、そういうものだというのである。魂を磨くその先に崇高さはある。

⑥判断基準

物事は陰陽の循環・運行である。その中で人間は決断して何かを選び、歩んでいかなくてはならない。しかし、物事は簡単に割り切れるものではない。ギリギリの判断を迫られることもある。そういう時の為の判断基準である。

⑦永遠の自己革命

生きるとは戦うことである。それは自らの魂の革命である。自己革新を止めたらお終いである。

⑧先人の魂へエール

先人の偉大な魂から力強いエールを受け取れることほど励まされることはない。全て、生命燃焼の為である。

●美学を生きる

「葉隠」とは、我々日本人が、その歴史と文化の中で生み出してきた「人としての生き方」である武士道実践の方法論である。それは生き方の「美学」の一つである。そもそも「美」というものは、宇宙の秩序や法則のことであり、造化の力強さである。その「美」を、人間が実際の行動として世の中に展開していくことを「美学」と呼んだのである。

「葉隠」の言葉を抽出して、前述の八側面に配置していく。そこから更に抽出して「信条」として書き出していく。この信条は「誓願」の具現化の為の支えである。誓願や信条は、自分の中の垂直である。垂直とは、憧れとしてどこまでも崇高なもの的高みを目指して己を鍛錬することであり、同時に、己の立つ大地に根ざすことである。この社会での仕事や事業や人間関係や物質的なことは、世の中に展開していくものであって、垂直に対する水平である。仕事、学問、お金、人間関係、健康等の横系において、豊かさや成功や満足を求めるならば、垂直・背骨・縦系を、しっかり自らの中に打ち立てなければならない。

垂直という縦系（誓願・信条）に、色とりどりの横系を通して紡ぎ、様々な織物と成して、この世界に勇知仁を具現化していく。それが生き方の「美学」である。

では、抽出して配置してみる。八側面のどのカテゴリーに入れるか迷うものは、適当に配置する。配置は厳密である必要はない。

●八側面への配置

信条

①造化への帰依

- ・1-42 世界は皆からくり人形也、2-44 からくり人形
- ・1-44 1-104 義より上に道はある↓高段の智慧
- ・1-91 格を離れた姿がある(守破離)、
- ・1-36 義の上にある道の慈悲、
- ・1-39 ものが二つに成るが悪しき也
- ・1-97 理屈をつけては道が立たない
- ・2-106 何事も実
- ・義より上に道はあり 格を離れた姿あり 理を付けて道は立たず↓「無私」であること。私欲を立てるな。道の字は同じ事也

- ・義より上に道は有る也(1-44)、格を離れた姿あり
- ・ものが二つに成るが悪しき也。道の字は同じ事也(1-39)
- ・道と云うは我が非を知る事也 念々に非を知って一生打ち置かざるを道と云う也(1-47)

・理を付けて道は立たず(1-97)

・世界は皆からくり人形也(1-42→cf.2-44)

・「身は無相の内より生を受く」と有り。何も無き所が色即是空なり。其何も無き所に万事を備うるが空即是色なり。二つに成らぬ様に(2-31)

・不定世界の内にて、愁いも悦びも、心を留むべき様なきこと也(2-56)

・当介(あてがい 分相応)を思い、傲慢を捨て、我が非を知り、何とすればよきものかと探捉し、一生成就せず探捉仕り、死ぬに極まる也。非を知って探捉するが、則ち取りも直さず道也(2-11)

・死ぬまで極まらず、己の非を知って探捉するが則ち道也。

・嘆くまい喜びもしまい。とにかくに昨日は今日の昔であった(10-161)

②自立自尊の覚悟

- ・1-2 武士道とは死ぬことと見つけたり。
- ・1-13 武士道は死狂い↓忠孝はその中に含まれる、
- ・8-43 人の一身に大切なのは気概である 命などは散ってゆくものである
- ・武士たる者は生死を離れねば何事も役に立たず(1-47)
- ・武士は「命を惜しまぬ」に極まりたり(11-31)
- ・死に際の子き者は曲者也(11-125)

- ・一念発起すれば則ち立ち上がる事也(11-140)
- ・人間は造化の分霊(永久不慊)／独立自尊(絶対自慊)の覚悟
- 武士道と云うは死ぬ事と見つけたり↓私欲を立てるな。無私
- 武士は「命を惜しまぬ」に極まりたり↓私欲を立てるな。欲心があるから臆病にもなる
- ・武士道と云うは死ぬ事と見つけたり(12)
- ・武士は命を惜しまぬに極まりたり(11-131)
- ・武士たる者は、武勇に大高慢をなし、死狂いの覚悟が肝要也。不断(普段)の心立て、もの云い、身の取廻し、万綺麗にと心掛け嗜むべし(2-39)
- ・一生の仕事は人の為になるばかり。私を立つまじき私の情識を捨て古人の金言を頼む(1-6)
- ・諸事人より先に量るべし(1-46)
- ・諸事堪忍の事(1-46)
- ・何事も皆偽りの世の中に、死ぬるばかりぞ誠なりける 常住死人なに成りたるを誠の道に叶いたると云う也(10-56)

③ 生命燃焼の姿勢

- ・士たる者は名利の真中・地獄の真中に駆け入りても主君の御用に立つべき事也(2-139)↓敢えて「名利を求めよ」。いつまでも低い地位にいては、大きな仁を成すことは難しい。名利を求めない枯葉のような出家連中は腰抜けである。地獄や修羅場で立つてこそ人間の甲斐があるというもの。
- ・「士は名利の真中 地獄の真中に駆け入りても道の御用に立つべし」
- ・常住死身
- ・勇み進みて戦いに勝って浮かぶ心なり↓戦うことは生命としての自己の運命である。一歩も跡へ帰らず直に立ち向かうべし(2-18)
- ・「我は日本一」と大高慢にてなければならず。道を修行する今日の事は知非便捨(己の非を知れば、直ちにこれを捨てる)にしくはなし。斯様に二つに分けて心得ねば埒明かず(2-32)↓傲慢と謙虚さ
- ・「水増されば舟高し」と云う事有り。器量者、または我得方の事は、難しき事に出会うほど一段進む心に成る也(2-4)↓困難に遭遇したら欣喜雀躍してこそ男。
- ・気力さえ強ければ、詞(ことば)にても身の行いにも道に叶う様に成るもの也(2-133)を求めよ。下っ端では力不足。
- ・不仕合せの時草臥るる者は益に立たざるなり(2-1)↓大酒、自慢、奢りの三つが禁物。・不仕合せの時は氣遣い無し。ちと仕合よき時分、此の三箇条危うきもの也。それ故、人は苦を見たる者ならで根情据わらず。若き内には随分不仕合せ成るがよし。しほたれ草臥れたるは疵なり。勇み進みて物に勝ち浮かぶ心でなければ、用に立たざるなり。人をも引き立つる事これあるなり(1-73)

・「武勇の為怨靈悪鬼とならん」と大悪念を起こしたならば、首の落ちたるとして死ぬはずにて無し(2-52)

・1-73 1-83 勇に進みてものに勝ちて浮かぶ心↓人の気持ちを引き立てる

・1-89 鏡↓閑かに強みあるがよい

・2-1 不仕合せの時草臥るる者は益に立たざるなり

・2-52 武勇の為怨靈悪鬼とならんと大悪念を起こしたならば首の落ちたるとして死ぬ筈にてはなし

・2-138 無用のものもやり尽くせ

・2-1 始勝後戦(兼勝)

・2-142 病人は氣を引き立つる事肝要也

・勇氣をもつて前進し、何事にも打ち勝つ明るい心でなければ役に立たない。

他の人の心を引き立てて元氣にするというのは、こういうことである(1-73)

・不仕合せの時草臥るる者は益に立たざる也↓自分弱くするな↓私欲を立てるな↓無私↓道に近づく↓いやしくも武士たる者が、しよぼしよぼして意氣消沈した格好でいるのは情けない。

↓勇氣をもつて前進し 何事にも打ち勝つ明るい心でなければ役に立たぬ↓甘い私欲を手離せ↓無私↓道

・修行は大高慢でなければ役に立たざる也↓造化の道へ位育参贊↓無私

・結構者はすり下がり候、強みにてなければならぬもの也(2-11)

↓何よりも勇氣、勇氣、勇氣である。勇氣を出せ！

・詞(ことば)の勢いが武篇の大事なり。詞を掛ける勢いにて仕澄也(2-148)↓言葉で自らを鼓舞する

・兼ねて必死の極め候はば、何しに平生卑しき振舞いあるべきや(1-63)↓死を覚悟して生きるなら、くだらない姿勢で生きるはずはない！

・始終の勝ちなど云う事は知らず。場を外さぬ所ばかりをし仕覚えたる(2-35)

・武士たる者は二十八枚の齒を悉く噛み折らねば物事埒明かず(4-21)

④勇知仁の断行

・1-124 本氣にて大業は成らず。氣違ひにて死狂いするまでなり

・臆病魂一つ足り申さず候(4-8)

・7-40 勇氣を嗜みなさい↓cf.七転び八起き 達磨大師

・10-8 礼儀の大意始め終わりは早く中は静かに

・2-2 前疑いは臆病の本

・2-150 後手にならぬよう

・本氣にて大業は成らず 氣違ひ死狂いするまでなり↓

ものが二つに成るが悪しき也↓二兎を追う者は一兎も得ず(西洋の諺)

・何事も成らぬと云う事なし。一念起こると天地をも思ひほかすもの也。成らぬと云

う事なし(1-43)

・短気にしては成らぬ事もあり、ここぞと思う時は手早くたるみなき様にしたるがよ
き也(1-67)

⑤崇高さを目指す

・恋の至極は忍ぶ恋と見立て申し候。一生忍んで思い死にする事こそ恋の本意なれ
(2-1)↓「志 深き淵には音も無しげに騒がしきは浅き物欲」恋死なん 後の煙にそれと
知れ終に洩らさぬ内の思いを」

・「4」聖は非を知る↓道とは我が非を知りそれを改めること

・まず礼儀正しきこそ美しけれ(1-57)

・茶の湯の本意は、六根を清くする為也(2-18)↓畢竟、意を清くするところである。

cf. 誠意↓自らを欺かない(大学)

・6-16 我と他を分ける心が解けると自意識もなくて無自性であった

・6-19 勇智兼備して慈悲深し

・10-59 名人は難に臨み候て滞みなきもの也

・志は松の葉に包め(1-4)↓贈り物がささやかでも心を込めよ/志は見せるな「忍ぶ恋」

・人は内には勇知仁を備え 外は閑かに強み有るがよし

・内には知仁勇を備えること(2-7. cf. 2-10「勇 知 仁」)

・知↓人に談合するばかり也。量も無き智也。

・仁↓人の為に成る事也。我と人と比べて人のよき様にするまで也。相手を優先する。

・勇↓歯噛みなり。前後に心付けず、歯噛みして踏み破るまで也。

・外には風跡、口上、手跡なり。常住の稽古にて成る事也。大意は閑かに強み有る様
にと心得るべし(2-7)

・風体↓閑かに強み有る様に。

・口上↓閑かに強み有る様に。

・手跡↓閑かに強み有る様に。

・図に外れて死にたらば犬死気違いなり恥にはならず(1-2)

・見苦しき死をめされては無念の事に候(9-39)

⑥判断基準

・1-2 二つ二つの場にて早く死ぬ方に片付くばかりなり。

・1-5. 1-6 私欲を立てない

・1-108 分別は四請願に引き当て人を役に立たせる様、人に恥をかかせぬ様

・其人の恥に成らぬようにして良き様にする事(1-20)

・とかく気違いに極めて、身を捨てる片付くれば澄む也(1-193)

・1-121 七息思案

・3-34 当時気味良き事は必ず後に悔やむこと有る事なり

- ・ 1-83 良き事は苦痛に耐えること
 - ・ 3-4 我氣に入らぬ事が我為に成るもの也
 - ・ 10-21 士は不義を以て恥とす
 - ・ 10-46 人の中を避けて引っ込んでゐるのは臆病者である
 - ・ 二つ二つの場にて早く死ぬほうに片付くばかりなり
- 分別は四請願に引当てて 凡ゆる人を役に立つように 其人の恥に成らぬようにして良き様にする

- ・ 何の益にも立たず 人に恥をかせ悪口すると同じ事也(1-14)
- ・ 悪事は我身に被り申すこそ当介にて候(2-16)

⑦ 永遠の自己革命

- ・ 毎朝毎夕改めては死に改めては死ぬ(1-2)
- ・ 只今がその時 その時が只今(2-47)
- ・ 必死の観念一日仕切りなるべし(1-132)
- ・ 10-16 歎かじな悦びもせじ とにかく昨日は今日の昔なりけり
- ・ 修行は一生也
- ・ 二六時中も工夫修行にて骨を折り(2-139)

⑧ 先哲からのエール

- ・ (序文) 同じ人間が誰に劣り申そうか。修行は大高慢でなければ役に立ちませぬ。
 - ・ 1-25 父子兄弟仲悪しきは欲心より起こる、
 - ・ 1-49 人と相応する
 - ・ 1-51 どんな意見も聴く
 - ・ 1-61. 162 誰にも劣るまい
 - ・ 1-63 一和天道、2-35 場を外さぬよう
 - ・ 1-64 何事も人より一段立上がりて見ねばならず
 - ・ 1-69 本筋をさえ踏み外さぬ様に
 - ・ 1-173 ものを読むには腹にて読みたるがよし
 - ・ 1-200 自慢と奢り、2-1 大酒 自慢 奢りは禁物
 - ・ 1-202 知れることは浅いこと
 - ・ 2-126 軽い事は一喝
 - ・ 4-52 つつもの通り
 - ・ 4-53 作法 容儀 氣勢
 - ・ 4-55 人を好きになれば人は集まる↓誠でないに役には立たない
 - ・ 5-116 畳の上に座し候心持ちにて候えば草臥れ申さず候
 - ・ 5-138 元々更に事無く迷へば則ち凡夫と云うべし。
- ・ 情け容赦なく物事を覆すのでそれでは人のためにならない。

- ・7-1 自分に勝つというのは気を以て体に勝つこと。自分に追隨できる者がいないように心身を訓練しておかねば敵に勝つ事はできない
- ・9-36 世が末になったからといって人々が思いを腐らせ精を出さぬのは無念な事世に咎はない
- ・10-16 褒めるは損なう
- ・10-17 あればある なければないとするがよい 苦の無き神の宮移りだな
- ・10-137 争いごとは何事も相談
- ・11-3 心掛けが浅いと狼狽える
- ・11-6 善悪思わざる所善し
- ・11-33 皆が寝静まった後に計画を立てる
- ・11-36 ものには相応・不相応有り
- ・11-38 覚悟なくすればかえって仇になる
- ・11-40 人は立ち上がる所がなければものにならず
- ・11-41 逆(下から上)に突く
- ・11-45 士は難儀の時に手助けするのが義理
- ・11-60 人相応に語る
- ・11-61 男児は勇氣 女児は貞心(操、水棹)
- ・11-63 道の極みは身養生(早起き)にあり、「一日の計は鶏鳴にあり」
- ・11-64 与えたことは忘れる
- ・信心は心の掃除、人の心を破らぬように(直茂公御壁書21ヶ条)
- ・何ぞ人が人に劣るべきや。
- ・太陽のような男であれ
- ・四誓願に押し当て、私なく案ずる時、不思議の智慧も出づるなり(11-4)
- ↓ 必要なのは知識ではない。信念である。
- ・同じ人間が誰に劣り申すべきや(序文)
- ・何ぞ人が人に劣るべきや(11-20)
- ・彼も人也、鬼神にてはなし、少しも劣るべき謂れ無し(11-40)↓手に吹毛の剣を握り触れる所斬り去らぬもの無し!
- ・人が請け取らねば、如何様のよき人にも本義にあらず(11-56)↓人に好かれる事の大切さ
- ・人間に生まれ出るのも生々の大幸と存すべき事に候(11-58)↓人間として生まれたという己の運命を愛する
- ・ものを申し候時は向こうの眼と見合せて申すべし(11-60)
- ・仕合わせよき時、自慢と奢りが危なき也(11-74)
- ・よき事は痛さ堪える事也(11-83)
- ・無二無三(11-89)↓一つに集中/今に集中
- ・人間一生誠にわずかの事也。好いたる事をして暮らすべき也。夢の間の世の中に好

かぬ事ばかりして苦を見て暮らすは愚かなる也(2-85)↓若いうちは誤解するので秘伝。
・名人の上を見聞て及ばざると思ふは不甲斐なき事也。名人も人也、我も人也(2-116)
・芸能などは、道に引き入れる縁まで也(2-117)↓全ての物事は、人間を道に引き入れる為の『縁』に過ぎない。

・綺麗事では国は守れない

・好きになれ↓何事も本気に成らねば役に立たざる也

・兵法は身を捨てて打つべし(2-45)

・大事の思案は軽くすべし(2-46)↓小事の思案は重くすべし

・少々は見逃し聞き逃しの有る故に下々は安穩する(2-115)↓水至りて清ければ魚棲まず

・損さえすれば相手は無きもの也(2-26)

・まず種子は確かに握りて、さてよく熟する様にと修行する事は一生止まる事はならず(2-59)

・決定の覚悟薄き時は、人に転ぜらるる事有り(2-86)

・皆人氣短か故に大事を成らず、仕損ずる事有り。いつまでもいつまでもとさえ思えば、しかも早く成るもの也(2-130)

・奉公人の至極は家老の座に直り、御異見申し上げる事に候。此眼さえ付き候へば、余の事、捨てものなどは免し申し候(2-139)

・時は金也。泣き事を言っている暇はない。

・恥を与えては何しに直り申すべきや(2-14)

・翌日の事は前晚より案じ書きつけ置かれ候(2-18)

・七転び八起き(2-17)

・病氣などは氣持ちから重く成るもの也(2-28)↓病は氣から

・人に出会ひ候時は、其人々の氣質を早く呑み込み、其々に応じて会釈あるべき(2-4)

・夢が正直の試し也(2-10)↓見ている夢に志は出る

・志強く成り候ほど、夢の中の様子段々替わり申し候。有体の例は夢にて候。夢を相手にして精を出だし候(2-86)

・結構者はすり下がり候、強みにてなければならぬもの也(2-11)

・端的ただ今の一念より外は之れ無く候。一念一念と重ねて一生也(2-17)

・時代の風と云うものは知られぬこと也(2-18)↓時代の流行りは自由に変えられない

・武士は日ごろの心掛けが死後にまで現れ申すもの(2-27)

・今時の者無氣力に候うは無事故にて候(2-28)↓無氣力は甘い環境にいるから

・すべて人の交わりは飽く心の出て来ぬが肝要也(2-29)

・手紙一通も則ち向方にては掛物に成ると思ひて嗜みて書くべき也(2-42)

・手本↓色々な人からそれぞれの良いところを手本とする(2-46)

・「只今が其時。其時が只今也」。二つに合点して居る故、其時に間に合わず(2-47)↓日頃の油断、今日の不覺悟を反省せよ

- ・時に応じ変に乗り、詞(言葉)を掛くる勢いにて仕澄ます也↓ 詞の勢いが大切(2-108)
↓cf.2-126 軽き事には鳴り廻して澄ませたるがよし
 - ・武道の方、御国家の事に難を申す衆候はば、愛想尽きて強かに申すべし。兼ねてより覚悟仕るべく候(2-70)
 - ・当念に気を抜かず、上は手の理を見出すまで也(2-101)
 - ・人事を云うは大なる失也。誉むるも似合わぬこと也(2-103)↓己の修行に集中して口を慎め
 - ・智慧の害に成る所也。何事も実でなければ、能持(長続き)なきもの也(2-106)
 - ・自他の思い深く、人を憎み、似非仲などするは慈悲の少なき故也(2-108)
 - よき事も過ぐるは悪し(2-114)
 - ・意地は内に有ると外に有るとの二つ也(2-120)
 - ・小利口などにては物事澄まぬもの也。大に見ねば成らず。是非の沙汰などむざとすまじき事也。また、ぐなつきては成らず。切る所早く据わってつつ切れて、埒明かねば武士にてはなき也(2-121)
 - ・とかく酒の上にて理屈は違い申し候(2-123)
 - ・軽き事には鳴り廻して澄ませたるがよし(2-126)↓軽いことは大声で収めてしまうがよい
 - ・考え無し of 者ほど不憫なこと↓自分を良い者にして相手を悪者にするな(2-129)
 - ・歌道の至極は身養生に極まり候由。端的の善行は朝起きに極まるべく候(2-163)↓日の計は鶏鳴にあり)
 - ・大業をする者はゆず(融通)がなければ成らざるもの也(2-166)↓大行は細瑾を顧みず↓小さな欠点や誤ちは見逃せ(聞き逃せ)cf.水清ければ魚棲まず
 - ・其の長け相応相応にて害に成らざる分に了見し申し聞かすべき事也(2-160)
 - ・病人は気を引き立つる事肝要也(2-142)
 - ・物には相応不相応有り(2-136)
 - ・たとえご主人、傍輩の中に悪き事有りともそれに理屈をつけて褒めて置くまで也
- (11-128)
- ・もの云いの肝要は言わざる事也(2-123↓沈黙は金)↓cf.口を慎め
 - ・名将の御一言、裏を仰られる事も有るもの也(2-89)
 - ・兵法など習うは無益也。目を塞ぎ一足なりとも踏込み打たねば役に立たざるもの也
- (11-59)
- ・心を静むる事。唾呑み也。立腹の時も同前也。額に唾を付けるもよし(2-52)
 - ・一足も跡へ帰らず、直ぐに立ち向かうべし(2-118)
 - ・口論の時心持の事。「随分尤も」と折れて見せ、さきに詞を尽くさせ、勝ちに乗りて過言する時弱みを見て取りて返し、思うほど云うべし(2-110)
 - ・始勝後戦は兼勝の二字に極まる(2-11)
 - ・掛かるに待つを忘れず、待つに掛かるを忘れず(2-11)

・ 武士の前疑いは臆病の本と知るべし(二-2)↓深く考え込むな
・ 皮を切らせて骨を切る。無分別にならずば勝利なし(二-7)
・ 善と思う悪し。悪と思う善し。善悪ともに悪し。思わざる所善し(二-6)↓cf. 男は私欲を立てず 生死を離れるべし

・ 人中を避けて引っ込みたるは臆病者也。引っ込みて何事ぞよき事をするかと思えば悪念ばかり也。たとえ引っ込みてよき事をするとも宗風を奮い起こして道を開く事はなるべからず(10-147)

・ 人にはひたひたとして、さすが尾籠、緩怠もせぬ様に嗜み、表裏なきが人の本也(10-144)

・ 天下を取る事は大気、勇氣、智慧がなければならず(10-143)

・ 士は不義を以て恥とす(10-121)

・ あればある なければなきに するがなる 苦の無き神の 宮移りかな(10-117)

・ 本心に分別が付きたる時、臆病者に成り候(10-84)

・ 古も今も変わらぬ世の中に 心の種を遺す言の葉(いつまで人の心の種残す 模範となるは「古今」の言葉)(10-42)

・ 礼儀の大意、始終は早く、中は静かに仕り候(10-8)

・ 世が末に成りたるとて、人々思いくたし、精を出さぬは無念の事に候。世に咎は無^う(9-36)

・ 人の身に大切なるものは気味(気概)相也。命などは散りて行くもの也(8-43)

・ 人は四段有ると思う也。急々、急だらり、だらり急、だらりだらり也(7-43)→4-50

・ 勇氣を御嗜み候へ。勇氣は心さえ付き候へば成る事にて候(7-40)

・ 我に勝つと云うは、氣を以て体に勝つ事也。兼ねて味方数万の士に、我に続く者無き様に、我心身を仕成して置かねば敵に勝つ事はならぬ也(7-1)

・ 寝られぬ時は寝ず、寝らるる時寝る。食われぬ時は食わず、食わるる時食う(6-63)

・ 情け容赦なく物事を覆すのは、人の為にならない(6-63)

・ 柔和・慈悲心ばかりにて何として成るべきや、大勇氣なくして駆け入らるべからず

(6-21)

・ 一方向きにてなければ益に立たぬもの也(6-21)

・ 武士たる者は、忠と孝とを片荷にし、勇氣と慈悲心とを片荷にして、二六時中肩の割り入るほど荷いてさえ居れば、侍は立つなり(6-21)

・ たまたま人間に生まれ、思い出無くて死なん事は無念也。いざ天下を取るべし

(6-16)

・ 馬に乗りたると存ぜず、畳の上に座し候心持ちにて候へば、少しも草臥れ申さず候

(5-116→岩波5-66)

・ 「機嫌はよくい」(5-82→岩波5-31)

・ 小身成る者ほど元を忘れ申しまじく候。また、後を前に心得候事專一に候(4-65)

・ もの每好きの者は集まるものなり(4-55)

- ・油断すれば必ず落度有るもの也(3-49)
- ・我氣に入らぬ事が我為に成るもの也(3-41)
- ・当時氣味よき事は必ず後に悔やむ事有るもの也(3-34)
- ・時節到来と思わば潔く崩したるがよき也。その時は抱え留まる事もあり(3-27)
- ・義理ほど感深きものはなし(3-1)
- ・第一口を慎むべし(2-32)
- ・恥を与えては何しに直り申すべきや(1-14)

●精神的背骨

西郷隆盛は、修養処世の心掛けが千百三十三条に渡って書かれた「言志四録」から百一条を抜き出していた。約千三百のエピソードからなる「葉隠」から抽出する私の目安は、マンガラートを使用したので八の倍数程度が望ましい。信条の数は八×二十四程度。それを支える教訓は六十四×二百五十六程度としたい。

そして、信条の上に立つのが「四つの誓願」。これは「葉隠」の序文からほぼ流用させてもらう。四誓願の上に易経の構造と同じように「両儀」を置き、易の「太極」にあたるものを「全き一(崇高)」とする。

つまり、天地を貫き、己を垂直に志向させる精神的背骨は、太極である「全き一(崇高)」、両儀である「聖(非を知る・陰)」と「道(造化の体現・陽)」。そして「四誓願」と「信条」、玄德にまで及ぶ広範囲の「教訓」からなる。

次回、これを踏まえて「誓願」と「信条」を作り上げる。
今月も健康と健闘を。